〈講演録〉森海川に生きる人々のことば

〈講演録〉森海川に生きる人々のことば

講師 田中丈裕〈特定非営利活動法人里海づくり研究会議 理事・事務局長〉 飯野芳彦〈全国農協青年組織協議会 2017年度会長〉 中田無双〈北都留森林組合 参事〉

[解題] 「森海川に生きる人々のことば」に寄せて

今からちょうど100年前の1920年、日本で最初の国勢調査が実施された。当時、農林漁業を中心に第1次産業の就業人口は54.9%と最も大きな割合を占めていた。1950年の戦後の高度経済成長が始まる直前の調査でも同割合は48.6%であった。ちなみに、同年に生まれた人は現在70歳になる。

高度経済成長による産業構造の変化は第1次産業から第2次・第3次産業へと就業人口の 急激なシフトを招き、1975年の調査(同年生まれは現在45歳)で同割合は13.9%、以降も減少 が続き、直近2015年の調査(同年生まれは現在5歳)では3.5%となった。

これを食料の「生産者」と「消費者」という視点で見ると、現在70歳になる人が生まれた頃は2人に1人が食料の作り手であったのに対し、45歳の人が生まれた頃は7人に1人、5歳の子供から見ると実に28人に1人である。現在の日本は圧倒的に「消費者」が占めている。

農林漁業や食料の作り手を身近な存在として共に生きてきた世代から、しだいに遠くなり、今では別世界のことと感じる世代が大きくなっている。また、「農村」と「都市」といった住んでいる地域によっても捉え方は違うだろう。個人で見れば、世代によって、地域によって、農林漁業に対して実体験を通じ刷り込まれている感覚が異なり「見え方」が違ってくるのではないか。

農林漁業は人間が自然環境に直接働きかけを行う生産活動であるだけでなく、それに関係する人々の生活の場を形成するといった2つの側面がある。その営みは物質循環の起点であり、継続して行われることで食料生産だけでなく、我々の生活に様々な有形無形の恩恵(農

林漁業・農山漁村の多面的機能)をもたらしている。それは何千年といった時間のなかで繰り返されてきた営みであり、自然に対峙し土地に根ざして長い歴史のなかで人々の暮らしを支えてきた。それが今、危機にあえいでいる。

100年前と異なり、今生きている日本人には個々によって農林漁業の「見え方」が違うだろうし、地域には様々なステークホルダーが存在している。農林漁業と地域の持続可能性が問われるが、それを考えるとき注意すべきは、その「見え方」の違いだ。「生産者」と「消費者」、「農村」と「都市」、世代間といった違いも、同じ生活する者同士という意識がこの70年間で分断されてきた結果ではないだろうか。これを紡ぎ直して考える必要がある。

農林漁業は土地を離れては生業として成り立たず、そこには暮らしがある。長い歴史のなかでその土地(地域)で生きてきたことの"証"に持続可能性を見いだせるのではないか。そこで生きる人々が語ることは、分断された個人としてではなく、地域で先祖代々受け継がれてきた人間が自然とともに「生きる知恵」であり、等しく生活する者としての目線がそこにある。それを掘り起こすことに持続可能性のヒントがあると考え、今回、「森海川に生きる人々のことば」として講演録を編さんした。

持続可能性を巡り世の中ではSDGsという言葉が先行しているが、今回の講演ではSDGsを意識してお願いしたものではない。しかし改めて、その取組みをSDGsの目標に当てはめてみると複数の目標に合致し、それらを先取りしパートナーシップで実現しているのがわかる。SDGsの目標達成には経済一辺倒ではなく、複雑に絡み合う「経済×環境×社会」の課題を統合的・同時解決しなければならない。皆が同じ「生活者」として当事者の視点に立つことが必要だ。それが様々なステークホルダーを包摂し、生業・生活の取戻しの視点(始点)となるからだ。

目次

はじめに

- 1 漁業者による里海づくり(田中丈裕氏)
 - (1) 里海の概念
 - (2) 漁業は海のおこぼれをちょうだいする産業
 - (3) アマモ場の機能とその再生
 - (4) アマモ場の再生に取り組んだ漁業者と 科学者
 - (5) 歴史的な意味を持つ里海米

- 2 若手農業者が語る農地の歴史(飯野芳彦氏)
 - (1) 地祭りの意味
 - (2) 農業とは非効率が効率
 - (3) 農業の時間軸
- 3 流域の起点としての森(中田無双氏)
 - (1) 急峻な山の作業に必要な道づくり
 - (2) 自分たちの存在意義
 - (3) 流域は運命共同体